

子牛の観察を徹底することで 事故率低減と発育改善を実現 した和牛繁殖農家の取り組み

DATA 事業規模
所在地：北海道
飼養頭数：黒毛和種繁殖牛110頭
従業員数：3名

和牛繁殖農家で最も問題となる子牛の事故。和牛子牛の事故率は全国平均約4%と、経営に与える影響は大きい。今回は、子牛の観察を強化しながら、人工哺育や消毒の徹底などの基本的な取り組みを確実に実施し、事故率低減と子牛の発育改善を実現した事例を紹介する。

基本的な取り組みで事故率低減

この農場は、約5年前に酪農家から和牛繁殖農家に転換した農場である。これまで分娩直後の死産と子牛の事故率が年間20%程度に及ぶことに悩まされていた。このような状況の中、人工哺育の導入や消毒作業の徹底などを実施し、直近の半年間で子牛の事故率を7%程度まで激減させ、さらに発育を改善することができた。以下、その具体策を紹介する。

①人工哺育の導入

自然哺育から人工哺育に転換し、

ハッチで飼うことになると(写真1)、子牛の糞便の状況や飼料の摂取量などが個体毎にわかり、調子の悪い子牛に対しすぐに治療できるようになった。また、発育のバラつきがなくなり、斉一性が高まった。

②分娩時の立ち会い

母牛に対し飼料の給与を16~18時の一回給与にして昼間分娩を促すと、真夜中の分娩が減った。分娩時の立ち会いができるため、母牛の初乳給与が徹底できている。

③消毒の徹底

子牛の移動後、必ずロンテクトな

どの消毒液でハッチを消毒し、乾燥後に新たな子牛を導入している。ハッチのある牛舎では煙霧消毒器(写真2)を使い、グルタルアルデヒド製剤を2日に1回散布し、肺炎を引き起こさないよう注意している。

④粗飼料のカット

自給粗飼料のチモシーなどのロール乾草をカットし(写真3)、育成期にしっかりと粗飼料を食い込み、腹づくりができるようにしている。

⑤母牛の分娩前の増し飼い

分娩2カ月前の母牛への配合飼料の給与量を2kg程度まで増やし、胎内の発育を促進し、丈夫な子牛を産むため栄養充足率を高めている。

日々の観察で変化を見逃さない

これら対策以外にも水槽の掃除

(写真4)や子牛段階の敷料の充実、調子の悪い牛への体温測定の実施などを徹底した。

ただし、これらの対応の大前提として、牛舎を頻繁に回って牛を観察し、状態をチェックすることで、調子の悪い牛に対し早めに治療できるかどうかが最も重要となる。

なお、子牛の事故率を改善することで、哺育期の子牛を順調に発育させることができるようになった結果、素牛として出荷する子牛の増体も伸び、販売金額の増加につながってきている(図1、2)。

今後は「1年1産」はもちろんのこと、流死産合わせて5%以内の事故率を目標とし、繁殖後継牛の更新による高能力化を進め、強い繁殖経営を確立していくことをめざす。

子牛の事故率低減と発育改善に向けた取り組み

Point!

冬場対策のヒーターを設置



写真1：手作りハッチでの子牛の管理

Point!

空中での滞留時間が長いので効果が高い



写真2：煙霧消毒器による消毒

Point!

食い込みやすい5~10cm程度の長さ



写真3：ロール乾草のカット



写真4：水槽の掃除

図1：死産頭数と事故頭数の推移

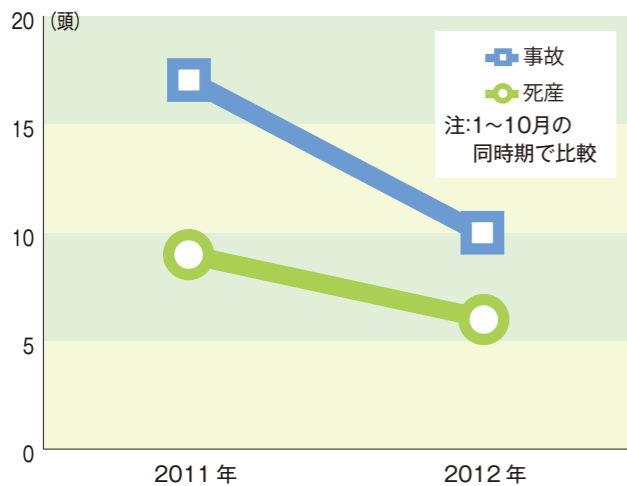


図2：出荷日数・体重と素牛販売金額の推移

